

會報

板垣會

第9号



板垣 退助



植木 枝盛



会報発行について

特定非営利活動法人・板垣会 会長 古谷 俊夫

地球環境の変化でしょうか。台風の進路が変わって来たと思います。本年は九州に上陸し、瀬戸内海に入り、松山付近に再上陸後は四国山地沿いに徳島に出て、紀伊水道を通り、和歌山付近に再上陸しました。従来は、豊後水道や紀伊水道に入り、高知県へも被害を及ぼしました。お陰様で台風常襲県の名称は聞かずに終わったように思います。

それにかわり、異常な暑さは、多雨と共に諸行事の中止・延期となりました。七月十六日の高野寺での板垣伯の命日の法要も中止となった次第です。

板垣伯の墓地の整備については、高知市当局のお計らいもあり、案内板や参道の整備を始め、数台の車が駐車出来るようになりました。板垣伯の墓参も年々楽しみになって来ました。地域住民の方々のお世話には深く感謝します。

戊辰戦争と幕末鉄砲事情



徳島大学名誉教授 渋谷 雅之

迅衝隊

慶応三年の京都で後藤象二郎や寺村左膳による大政奉還に向けた策動が行われていた時期、土佐で乾（板垣）退助が六月に大監察に任ぜられ、七月に仕置役（参政）に進められたのは、山内容堂が退助を要職に束縛して危険な動きを押さえようとしたためと推測されている。毒をもって毒を制する、というのは容堂がよく使った手である。一方乾退助は京都で西郷らと倒幕の密談をかわし、倒幕拳兵にあつては容堂の命令にかかわらず薩長と行動を共にすることを約束していたのである。大監察の辞令には「御軍備御用兼帯」が付いていた。この時期、洋式兵制への脱皮は主義主張にかかわらず土佐藩の緊急課題であり、指導できる人材は数少なかったであろう。退助が藩内の同志を募り、拳兵の準備を進めるうえで、この辞令が有効に働いた。乾退助の周辺は、その絶対的信奉者によって取り巻かれており、の

ちの戊辰戦争では迅衝隊を組織して無類の団結力を発揮することになるのである。山内容堂にとつて危険思想の持ち主ながら、容堂は若い乾退助の能力と覇気を愛し、二人の関係が奇妙な細い糸でこの時期までつながっていた。

大政奉還後の慶応三年十二月二十八日、西郷吉之助から江戸の薩摩藩邸焼き討ちの情報を得た谷守部（干城）は、京都で戦争が起ることを察知し、大仏本陣の執政に土佐から兵隊の呼び寄せを主張した。兵士呼び寄せのため谷守部が帰国する件は、王政復古クーデター（十二月九日）の直後に決定されたが、徳川慶喜が京都から兵を引いたことにより見合わされていたのである。総督・深尾茂延（山内隼人）は三十日になって「片岡健吉に半大隊を率い上京せしめよ、乾退助は決して上京せしむべからず」と命じた。深尾茂延は容堂の意のままに動く家老である。容堂や京都詰めの守旧的家臣たちにとつて乾退助は「何をしでかさかわからない危険分子」だったが、西郷や谷

の意図はむろん乾退助を出京させることにあり、これ以後山内容堂の命令が無視されることになる。

大監察、小監察、徒目付（樋口真吉）を含む十二名が朝廷から下された錦旗を護つて京都を出発したのが翌慶応四年正月十三日である。途中、神戸事件に巻き込まれ錦旗を奪われそうになるトラブルがあったが、一行は正月十八日、丸亀に渡海したところで、谷守部が呼び寄せた迅衝隊千百人ほどに遭遇する。迅衝隊は朝敵となった高松、松山を接収する朝命を受けていた。

高松城の接収を終えた乾退助、片岡健吉らの迅衝隊主力は二十二日、松山接収を総督・深尾刑部（重愛・深尾鼎養子）の土佐兵四百八十余名と第二陣の深尾左馬之助（成名）の軍に任せ、京都に向けて丸亀を出港した。この日、樋口真吉は高松城中において「輻重ノ役」を命ぜられる。真吉は輻重方として迅衝隊の東北遠征に従軍し、それまで培った文武の知識と人脈を駆使して新式銃の調達に努め、縦横の活躍をみせることになる（資料1）。

当初東海道先鋒軍に加わる予定だった土佐軍は、二月十一日、東山道先鋒軍に繰り入れとなった。総督は岩倉具定（十六歳）、乾退助（三十二歳）が参謀である。谷守部は大監

察(大目付)として板垣を補佐する要職に就いた。乾退助とは同年代である。谷は青年の頃、土佐における雷管銃の開祖と称される西内清蔵に師事して西洋銃砲術に目覚め、自ら「およそ士たる者学門と砲術にて足る、槍刀、弓術の如き徒勞蛇足のみ」と広言した(資料2)。

東征軍は木曾山中を進み、三月朔日には諏訪峠を越えたが、因州、土佐の藩兵は谷守部の提案により本隊から別れて甲州へ進軍する。三月五日、甲府城に入城し、六日に土佐軍の最初の本格的戦闘となった勝沼の戦が行われた。乾退助は奥州の人心掌握を図るため、甲府において板垣退助と名を革めた。

土佐軍は江戸に迫り、四月四日江戸城は無血開城した。四月十七日、大鳥圭介の一軍により小山が占拠され、惨敗した征討軍が江戸に増援を求めてきたため、土佐軍は薩摩、長州、因州、大垣の諸藩兵とともに直ちに出勤し、ここに安塚の戦と呼ばれる激戦が展開される。板垣退助は四月二十六日に江戸から壬生に着いたが、宇都宮攻城に遅れた藩兵の不評判を聞き、雪辱を期して日光進撃を決意する。結果的に、日光の文化財を焼亡から救うことになった。

六月に入つて樋口真吉は板垣退助の迅衝隊と別れて横浜に到り、ファールブラントと交

渉して連発銃の調達を行った。このスイス人は文久三年日瑞修好通商条約締結使節団の私費使節団員として来日して横浜に商会を設立した人物である。時計、宝石、銃砲などを扱い、薩摩、長州、長岡の著名人との武器取引が活発だった。河井継之助に武備中立の方途を教えたと言われ、北越戦争における長岡藩の善戦はファールブラントが整えた大砲、小銃に拠るところが大きかった。

真吉が調達した連発銃は米国のC・M・スペンサーにより開発され、一八六〇年(安政七年)に特許が取られたライフル銃で、銃床底部に管状弾倉を挿入して給弾する連発式である。トリガーガード(引き金を囲む金属部分)がそのままレバーとなっている「レバーアクション方式」である。レバーを前方に動かすと排夾(使用済みの薬莢をはじき出す)、後方に動かすと装弾(弾を込める)ができる方式で、アメリカの西部劇でよくお目に掛かる銃としておなじみである。

奥羽戦争前後においては土佐藩でも連発銃はかなりポピュラーなものだったらしく、その記録が多い。スペンサー銃は基本的に七連発または十連発だが、後継の「ウインチェスター銃」には十三連発の騎兵銃や十六連発の歩兵銃があった。おそらく奥羽戦争中に樋口真吉が購入した連発銃は数百挺にのぼったと思われる

が、土佐軍の戦費には限度があった。そこで、これらの新式銃を持つためには個人の出費を強いることもあったらしく、北村長兵衛(重頼)の砲隊に所属して東征軍に加わった中山源次郎が郷里の父兄に送った手紙に次のようにある(資料1)。

何分本込七連類ならては尤不便利と申二至リ、され共御上二御払底之御場合二候ハ、銃手二不残御渡し被成程之御手順をも付兼申趣、其事情確聞江候而ハなげとも難申上、孰も自金を以七連之本込銃丈二相成申候

——つまり連発銃がなくては戦えない状況になっているが、軍費がないのである。手持ちの二十九両に少し借金して、三十三両余りで弾丸二百発付きの七連銃を手に入れ、郷里に報告の手紙を送ったのである。

新兵器を得て勢いづいた迅衝隊は会津若松に迫る。八月二十一日から二十三日にかけて母成峠を攻略し十六橋を突破して若松城下に突入した新政府軍の驚くべき速攻は、陸戦用アームストロング砲やスペンサー連発銃、さらには薩摩兵が装備していたであろうフランス製シヤスポー銃(後述)の威力を強く想像させるものである。その意味で、横浜との交通が遮断された東北諸藩の劣勢は銃器の差により加速されたと言つていい。奥羽諸藩にとって命綱



母成峠を越えて、会津若松城下に迫る迅衝隊

となった新潟港は五月から仙台、会津、庄内、米沢四藩の共同管理となり、プロシア人（オランダ国籍）・スネル等の武器商人が暗躍したが、その物流規模は横浜とは比ぶべくもなかったであろう。

幕末鉄砲事情

幕末から明治初年にかけてた時期、諸外国では戦乱が続く、必然的に軍事科学技術の急速な進歩がそれに伴った。この時期の主要な戦争は次のようである。

南北戦争（米国内）…文久元年（一八六一）
（慶応元年（一八六五）

普墺戦争（プロシア・オーストリア）…慶応二年（一八六六）

普仏戦争（プロシア・フランス）…明治三年（一八七〇）（明治四年（一八七二））

長い平和的鎖国の時代から、突然幕末維新の戦乱時代になだれ込んだ日本の軍事技術は直接的に諸外国のそれに依存することになる。そして外国の大きな戦乱は日本の幕末維新とピタリと重なってしまったのである。基本的に外国の戦争前や戦争中は兵器の輸入は困難で、旧式兵器や戦後に不要となった兵器が大量に日本になだれ込むという構図となる。

文久元年十月、大石弥太郎（圓）は藩より中国・九州諸藩の情報収集を命じられ、長州など各藩を訪問した後長崎に派遣された。この時期、幕府がオランダに注文した施条銃（ミニエー銃）二千挺が長崎に着き、希望の藩に分与することになっていた。幕府は外国による侵掠を恐怖し、日本全体の防衛力強化が欧米の強国に対抗するために必要不可欠と判断していた。この時期に強化をはかった「国防力」は、皮肉にも維新内乱の道具に転用され、幕府の没落を早めてしまうのである。

大石は決断し、藩主の名義で小銃の購入を長崎奉行所に申し込み、ミニエー銃一千挺の購入に成功する（資料3）。大石弥太郎が買い付

けに成功したミニエー銃は、先込式（前装式）ながら円錐弾（椎の実形弾丸）を使用する当時最新式の施条銃だった。

この銃の原理は弾丸にあつたので、既存のライフル銃に合致した直径の弾丸を製造すれば、その銃がミニエーライフルに変身することになる。「エンフィールド銃」は、それまでのライフル銃を、ミニエー弾の特徴を最大限に活かすように、イギリスのエンフィールド造兵廠で改良された前装式の施条銃である。鳥羽伏見戦前後に薩長軍が主力銃としてこの銃を採用した。その後イギリス政府は、前装式エンフィールド銃を安価に後装銃に改良しようとして研究をかさね、一八六六年（慶応二年）に新



スナイドル銃(国立歴史民俗博物館)



シャスポー銃(陸軍省「兵器沿革史 第一輯 附図」)



10連発スペンサー騎兵銃(四万十市立郷土資料館)

しい後装銃の形式を決定し、これを「Snider-Enfield rifle」と呼んだ。日本では一般に「スナイドル銃」や「スナイダーライフル」などの名で呼ばれた。坂本龍馬が慶応三年長崎で土佐藩に納入する銃の選定をおこなった時期、すでにアメリカからスペンサー連発銃が輸入されていたが、価格の点で折り合わず、ミニエー銃またはスナイドル銃が選ばれたと考えられている（資料1）。イギリスでこのスナイドル銃が開発された時期、早くも次世代の後装銃の開発が進んでおり、イギリス軍はスナイドル銃を求める人々に積極的に売り付けたいという事情があったとされている。

土佐藩の迅衝隊は、前述の大石弥太郎が買付けたミニエー銃と、坂本龍馬が納入したミニエー銃、合計二千挺に、幕末に米国から大量に輸入されていたスペンサー連発銃を加えて戊辰戦争を戦ったことが想像される。

ミニエー銃は戊辰戦争においては旧幕府軍、新政府軍のどちらも主力銃として用いた。そしてそれに加えられたプラスチックの銃が両軍の明暗を分けた。新政府軍と旧幕府軍が使った主力銃は、鳥羽伏見戦争前後は両軍とも先達ミニエー銃（エンフィールド銃）だったが、それからわずか三ヶ月後の江戸開城以後、両軍とも主力は元込ミニエー銃（スナイドル銃）に一変していた。これらの銃に南北戦争後のア

メリカから大量に輸入されたスペンサー連発銃がどの程度加わるかによって戦力の違いが生ずる。

「維新戦役實歴談（資料4）」という元長州藩士による書物がある。この書物にある杉山素輔の証言は次のようである。鳥羽伏見の戦いに勝利したあと、長州兵が江戸に入った慶応四年閏四月三日の記録である。

其所で品川に於て愈々銃を「ミネール」と「スナイドル」と取替へると云ふことになりまして、始めて「ミネール」を廃して「スナイドル」と云ふ鉄砲を受取りましたが、併し「スナイドル」と云ふものはどう云ふことをして発砲するのであるか、発砲したことが無いから彼所の台場へ行つて発砲して見やうと云ふことで、撃つて見ましたが、成程斯う云う風に遣れば発砲が出来ると云ふやうな訳でありまして……

長州兵が江戸に入った段階で、制式銃がミニエー銃からスナイドル銃に変更されたという記録である。兵士達はスナイドル銃を手にするのが初めてだったようであり、この銃が大量輸入されはじめた直後であったことを想像させる。

長州を含む各藩の装備については奥羽鎮撫総督参謀などをつとめた木梨精一郎の証言が次のようにある（資料4）。

各藩の銃器は皆なミネールでした、それから薩摩の銃は皆七連でした、長州兵は七連とスナイドルでした

「七連」とあるのはアメリカ製スペンサー連発銃のことである。土佐軍の場合はエンフィールド銃とスナイドル銃に加えて、このスペンサー銃を徐々に補充しながら戦ったようである。一方、旧幕府軍の場合、奥羽戦争では東北地方の諸藩が加わったため、ミニエー銃が行き渡らない場合は滑腔式ゲベル銃や、一部火縄銃まで動員されたと思われる。ゲベル銃の実効射程は火縄銃とほぼ同等で五十メートルほどしかなく、ゲベル銃とミニエー銃の射程には十倍以上の差があった。

撃針銃

幕末の時期、ヨーロッパで研究されていた新式銃の代表的なものが撃針銃だった。この銃は史上最初に登場した元込銃である。プロイセン陸軍が制式採用したものは炸薬を起爆させるための長い撃針を用いたので、撃針銃（撃針銃）と呼ばれた。プロイセンのドライゼにより発明されたので「ドライゼ銃」とも呼ばれ、現代銃の原形となるものだった。

後装式ドライゼ銃の開発は一八三六年と早く、プロイセン軍に制式採用されたのは

一八四一年（天保十二年）のことだった。したがって日本でも早くから注目され、幕府はその輸入を画策していた。文久元年、通商条約締結のためロシアはオイレンブルク伯爵の坐乗するアルコナ号を日本に派遣する。アルコナ号はドライゼ銃で武装していたと思われ、幕府の役人がその取得を画策した様子がオイレンブルクの「日本遠征記（資料5）」に記録されている。その後幕府がヨーロッパに派遣した竹内保徳使節団（文久二年）や池田長発使節団（元治元年）でも撃針銃の調査と試験的購入の試みが継続された。

その後撃針銃およびその弾薬は長年にわたって改良が続けられて進化し続け、フランスではシャスポー銃を開発した。シャスポー銃は、普墮戦争でドライゼ銃を使用したプロイセン側が大勝したことに危機感を覚えたフランス陸軍が開発した銃で、ドライゼ銃より射程距離が拡大されており、機能的にはドライゼ銃に勝る点が多かった。そして慶応三年のパリで大量のシャスポー銃が薩摩藩により購入される。薩摩藩家老岩下佐次右衛門（方平）は「欧州使節並仏国博覧会総督」としてパリ万国博覧会に出席し、京都の西郷、大久保と連絡をとりつつ壮大な外国交際の方途を摸索していた。薩摩藩は諸藩割拠による「大名同盟」を画策し、その経済的基盤としてベルギー商社

の設立を模索した。この計画は破綻し、薩摩藩は天皇を元首とする統一国家主権の奪取に向けて大きく舵を切ることになるのだが、岩下方平は外交活動の一方でフランス貴族モンブランの周旋により五千挺のシャスポー銃購入に成功するのである（資料6）。このとき購入した二千メートルの射程を持つ最新式シャスポー銃は戊辰戦争における会津若松攻撃の最終段階で薩摩軍の制式銃として登場したのではないかと想像される。

ともあれ、撃針銃の開発が早かったにも拘わらず日本への輸入が遅れたのは、ロシアやフランス国内の需要が優先され、輸出が制限されたためと思われる。幕府の兵制近代化に向けた早くからの取り組みにもかかわらず、普仏戦争を前にした欧州事情のため、撃針銃の日本への輸入は思うに任せなかったであろう。これら新式銃の登場により、ヨーロッパで不要になりつつあったスナイドル銃などが大量に日本に渡つたのである。薩摩藩によるシャスポー銃購入はこうした国際情勢の間隙で突発的に生じた珍事だったと言うべきであろう。一方、幕府は四境戦争の敗戦を受けて、紀伊藩を通じて三千挺のドライゼ銃（撃針銃）を含む大量の兵器をドイツ商人・カール・レーマンに発注するが（資料6）、すでにそれは手後れだった。総じて日本の幕末から戊辰戦争の

時期を通じて使われた主要な武器は欧米諸国で不要となった旧式の輸入銃砲であった。フランスとの連携にこだわった幕府の軍事的不利は必然的な結果だったのである。

維新後

そして舞台は戊辰戦争終結後の日本に移る。

ドライゼ銃の改良形であるD. F. V. B式（Dörsch und von Baumgarten式）撃針銃が日本に持ち込まれた一八六九年六月二十九日（明治二年五月二十日）、カール・レーマンが見たものは、戊辰戦争終結直後の変わり果てた日本の姿だった。会津藩の消滅により宙に浮いた千三百挺の撃針銃代金の支払いを求め、レーマン・ハルトマン商會が旧会津藩士中沢帯刀らを相手取り、明治八年まで訴訟を続けたことを示す大量の記録が長崎歴史文化博物館に現存する（資料6）。

ともあれ、奥羽戦争は、わずか半年あまりの短い期間に銃砲の激しい性能向上競争とともに進化した希有な戦いだったのである。言い換えれば、この戦いの最終段階は「武器輸入戦争」だったと言っても過言ではない。

幕末の時期、幕府は鉄砲の輸入だけでなく兵式全般をフランスに学ぶ方針をとった。フ

ランスより陸軍教師・ブリュネーを招き編成した大島圭介の伝習隊は戊辰戦争中関東平野に横行し、新政府軍をさんざんに悩ましたのである。それらの経験から、維新後の日本陸軍はフランス式を採用する。そして会津若松戦以降に登場したであろう薩摩藩のシヤスポー銃は薩摩の村田経芳により改良され「村田銃」として日本陸軍の制式銃となる。高知藩においてもフランスのアントアンヌ少尉や旧伝習隊士官らの指導によりフランス式兵制が採用された。

明治四年、薩摩、長州、土佐は兵を東京に送り、御親兵が編成される。土佐から送られた兵には騎兵二小隊が含まれていた。その編成には、板垣退助のもとで樋口真吉が心血を注いで買求めたスペンサー十連発騎兵銃が基盤となったことが想像される。現代の高知県下に残る維新当時の銃が、スペンサー十連発騎兵銃ばかりであることは、何事かを語っているかもしれない(資料1)。

資料

- (1) 近世土佐の群像(7) 樋口真吉日記(下) (渋谷雅之 私家版 平成二十五年)
- (2) 隈山詒謀録(谷干城遺稿一 日本史籍協會編 東京大學出版會)
- (3) 従五位大石圓翁略伝(寺石正路 私家

版 大正九年)

(4) 維新戦役實歴談(児玉如忠編 維新戦没者五十年祭事務所 大正六年)

(5) オイレンブルク日本遠征記 下(中井晶夫 訳「新異国叢書13」 雄松堂書店 昭和

四十四年)

(6) 長井長義と幕末鉄砲事情(渋谷雅之「近世土佐の群像別巻(2) 日野草草残映」私家版 平成三十一年)

幕末・明治時代の医師

容堂公侍医・楠 正興



板垣会 理事 楠 正浩

1、はじめに

板垣退助と同時代、土佐で活躍した人物で楠正興(くすのきまさおき)という医師がいた。旧名を町権蔵(まちごんざう)といい、長岡郡久礼田村出身の町医者で私の高祖父にあたる人である。

土佐には「大楠公の末裔ありて多くは楠瀬をもつて姓となす」という言い伝えがあったといい、鎌倉時代の武将楠木正成が後醍醐天皇より賜った安芸荘(現、高知県安芸市)へ、その一族が落ち延びたことも伝えられたという。そのような古い家伝が残る中、我が先祖も

「楠瀬」から「町」へと姓を変えながら代々医業としていたが、当家に残る資料や参考文献から正興の人となりを紹介してみたい。

2、土佐・大阪・京都での医学修業時代

- (1) 正興は文政12年(1829) 9月23日、医師・町正命の子として長岡郡久礼田村(現、南国市久礼田)に出生、幼名を猪之助、後に権蔵と名乗った。父正命が早世したので祖父正家に養育され、11歳より19歳まで「同郡領石村大塚希齋」について「普通学」を学び、

弘化4年(1847)1月から同年12月まで「藩主侍医荒川門二従と漢方内科」を修業した。

- (2) 21歳で土佐を出た正興は、嘉永4年(1851)3月より同6年(1853)12月まで「摂津国大阪府医師日野葛民」に「洋式内科」を修業した。

また、同氏方より通学をして「同国同処医師榎林榮助」に「洋式外科」を、同じく「同国同処医師華岡準平」に「漢方外科」を、さらに「同国同処医師緒方洪庵」に「洋式内科」をそれぞれ修業している。

- (3) 再び土佐へ帰り、安政5年11月から文久元年(1861)3月まで開業しているが、この時期に正興の名が世間に出たものか、「初メテ名アリ遠近」(藩主「ヲ聴キ」は判読できず)とあり、続いて「攝津国住吉山内豊範公陣営詰命ゼラレ勤仕」している。文久元年(1861)4月から同2年(1862)

8月までのことである。

また、この住吉陣営詰中に通学をして「大阪府医師緒方郁蔵」に「洋式内科」を修業、さらに西洋式の産科、内科医として有名な賀川南龍にも学び奥儀を極めたという。

3、山内容堂公の御側医を拜命する

- (1) 文久2年(1862)9月、33歳になった正興は土佐に帰り、慶応2年(1866)2月まで久礼田村で開業した。

これまで修業を重ねてきた蘭方医術や西洋医術を提唱し治療に当たっていたところ、起死回生との高い評価を受け、正興の名は益々高まったという。

- (2) 慶応元年(1865)5月8日「歩行格二召出サル」。



幕末頃の正興とみられる写真 (楠家蔵)

正興の評判を聞いた土佐藩は直ちに藩医に抜擢した。先般、土佐藩家老高知深尾家の現御当主、深尾和男氏から、久礼田村は山内家より高知深尾家がお預かりした領地であったとのご教示を頂いた。このことにより、藩医としての抜擢には、高知深尾家のご縁もあったのではとの想像を膨らませたものである。

その後、山内容堂公に御側医を拜命、高知城下水通町に住み、以後、容堂公が京阪や江戸へ赴く折には常に随従、公の信任が最も厚かったという。

- (3) 慶応2年(1866)11月「容堂公ノ命ヲ以テ死体解剖シ上覽ニ入ル是レ縣下ニ於テ該術ノ始メナラン」とある。

この場所は九反田にあった藩の開成館であったろうか。当家の資料によると、正興は当時「開成館医局」で解剖係を任じられていたが、当局に対し「開成館の建物では解剖実験もできず、また見学する者にも大いに不便だ」と「人体の解剖所」を建築するように進言、西洋医学の進歩には何よりも解剖実験の大切さを説明している。

- (4) 慶応3年(1867)3月「正二位容堂公侍医留守居組二召出サレ即刻更ニ小姓組二召進ス」とあり、町医としては異例の

ことであつたらう。

- (5) 慶応4年(1868)正月「鳥羽伏見戦従軍」とあり、正興は当時容堂公に随行して京にいたと考えられるが、「土佐藩戊辰戦争資料集成」では正興(町権蔵)の名前を見つけることはできない。

4、身を賭した治療と公の典医腕試し

- (1) 慶応4年(1868)2月「容堂公西京ニ於テ○○○ニ罹ラレ衆医諸種々之藥石ヲ以テ治ラ試ルト■■■■功驗ナク病症益々危篤ニ迫ラレ此ニ於テ断然射血法ヲ行ヒ暫時全快セラル(○は空欄、■は判読できず)」とある。

この場所は京都新町にあった旧守護職の屋敷だと思われ、堺事件が勃発した当時のことである。この出来事については、いくつかの文献に取り上げられており、容堂公の病状が「急性肺炎」や「劇症肝炎」などの相違はあるが、話の大筋においては同じである。

- (2) その中で、正興の尚徳碑には「明治元年2月、容堂公は京都で劇性の肝癒衝にかかり、彼は瀉血の術を行おうとしたが、周辺の者は難色を示した。彼は「若しその結果万一のことがあれば、まさに身を

もつてこれに殉ずる覚悟である」と決然としていった。山川侍医も其の説に賛同し、協議は決定した。術後間もなく呼吸は緩やかに、脈搏もしつかりしてきて、病勢はくいとめられた。英人医師ウリスも治療にあたり、病氣は治ったので、彼はますます有名となり、容堂公はその功を賞して、山内家の家紋入りの時服と金若干を賜った」と印されている。

- (3) また、容堂公と正興との逸話として、町田且龍(土佐の医師政治家)は以下のように紹介している。

「楠正興君は内科医としてなかなか流行った。岡村景楼君と双壁であった。或いは岡村の方が流行ったかも知れないが、人格見識は寧ろ楠君の方が高く、容堂公のお気に入りであった。ある時容堂公が病氣というので、典医の連中は代わる代わる拝診したところ、どうも可笑しいことに



晩年の正興(明治15年・楠家蔵)

は、脈拍がない。典医連は色を青くして狼狽するのみ。そこで公は町権蔵(正興のこと)を召して診察させた。容堂公(どうだ、どこが悪いのか)正興君一語を發せず、引き下がる。性急な公は重ねて(どこが悪いと言ふのじゃ、言えないか)と叱るように言う。そこで、正興君、再び公の脈をとる振りをして、公の袖裏へ深く手を差入れ、上腕のところをギュッと堅く握つて(ここが悪いです、ここが)と引き下がった。公は忽ち破顔一笑、(よし、よし)と大喜び。実は公が典医を試みたため、上腕を御殿女中の腰紐で緊縛せしめてあつたものだ。それとは知らぬ典医連は、冷汗を流しながら、只々その病源をつきとめんと苦悩していたものであつた。こんなことがあり、一層公の信任を博し得た」(引用は現代口語にして)。

5、急ぎ上京するも公の最後に間に合わず

- (1) 明治元年(1868)「直ニ容堂公ニ從ヒ東京ニ至リ箱崎邸内ヨリ大学東校工通学英国医師○○○○氏ニ就テ三年間洋式内科修業ス(○は空欄)」とある。

この英国人医師とは、文献によると大

学東校御雇外人ウイリアムウイリス氏のことであり、容堂公と交流のあった同氏の下で研鑽を積むなど厚く信頼された様子が伺える。

- (2) 明治3年(1870)11月「町姓ヲ楠ト革ム」とあり、当家の資料や文献によると、容堂公の命令により祖先の姓である楠姓に復したものである。

- (3) 明治4年(1871)8月「骸骨ヲテ國に帰り直ニ御久礼田村ニ於テ同七年三月迄開業ス(■は判読できず)」とあり、侍医を免じられ帰国、久礼田村で開業した。

その正興が病院として使用した建物は、長宗我部元親の重臣として仕えた久礼田氏の菩提寺「在天寺」が、同年の神仏分離令で廃寺となったものを使用したと言われている。同7年(1874)に高知市に病院が移転した後は、同8年(1875)久礼田小学校設立により校舎として使用され、以後同17年(1884)の植野小学校への統合まで久礼田小学校として利用されていた。

- (4) 明治4年(1871)9月「高知官立吸江病院ニ■召サルト■辞シテ其職ヲ奉セス(■は判読できず)」とあり、文献によると県立病院長として招待されたが受

けなかったという。

- (5) 明治5年(1872)6月「容堂公御病氣ニ付御招キノ急報久礼田村ニ達シ即日発足東京ニ至レハ公既ニ薨去ノ後ナリシ」。

- (6) 明治5年(1872)8月「権蔵ヲ正興ト革名ス」。

- (7) 明治7年(1874)4月「高知追手筋ニ転居シ以後同処ニ於テ開業ス」とあり、正興はそれまで久礼田村で開業する傍ら、高知城下北門筋に出張所を設け週に1度診療に当たっていたが、高知市民より来住の要望が絶えず、追手筋の野本邸を購入し楠病院を開業したものである。



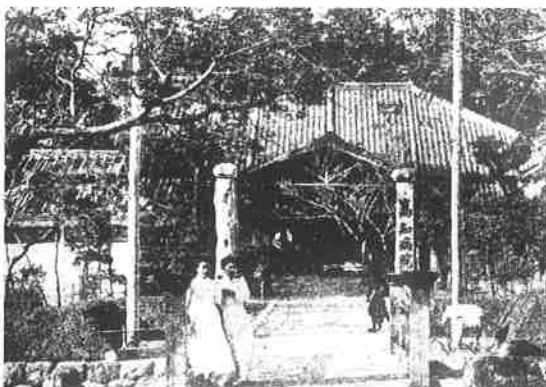
明治末の楠病院(楠家蔵)

6、自由党をさし挟んだ県立病院の経営権獲得競争

- (1) 明治7年(1874)8月「高知県病院長ニ命ゼラレ同年九月願ニ依テ免セラレ」とある。

この高知県病院とは、文献によると明治5年(1872)11月に発足した「公立興基病院」が同7年(1874)8月に廃止され、「高知県公立病院」と改められたものことであろう。また、同病院は幾度かの改称を経て、明治20年(1887)に「高知県立病院」となっている。

当家の資料では、なぜか正興は願いに



明治末の高知病院
(写真集「明治大正昭和 high」(国書刊行会)より)

より僅か一ヶ月で病院長を辞職しているが、この「高知県立病院」の民営化をめぐり、その17年後、正興の嫡子楠正任と町田旦龍が、自由党をさし挟んで互いに対立競争することになった。

(2) 県は明治24年(1891)、民間病院の増加などにより、年々赤字が累積し経営が圧迫していた県立病院の経営を民間に委譲することにした。町田旦龍は、過去に「刀圭自由党」という青壮年医師達で集まった自由党内部の組織を率いるなど政治活動を続ける一方、当時は高知市帯屋町に博済病院を経営し自ら眼科を担当していた。

一方、正興の嫡子楠正任は明治20年(1887)に東京帝国大学病院助手を辞し、楠病院長として診療と経営に当たっており、高知市本町にあった武田病院、帯屋町の博済病院と並び当時「高知



晩年の楠正任(楠家蔵)

三大病院」と謳われた一角であった。この民間移譲に際し、町田は医師であると同時に政治家・事業家としての洞察力や決断力をもとに、同年の県会に県立病院の払下げ建議案を提出した。ところが同時期に、同じ自由党系の正任も同病院の経営権を望んで運動を起こしたことで、県下の医界と政界を二分する対立に発展した。

(3) この内情を町田の伝記を基にみてみると、町田派を支持したものに高知市旭で開業していた医師の横山董、弟で高知商業学校の創立者横山又吉、県会議員の都築茂理馬、医師で県会議員の秦毅郎などの自由民権家や、その他医師達が参加していた。

一方、楠派は県会議員で後に衆議院議員となった岡崎賢次を筆頭に、後に衆議院議員・実業家となった中沢楠弥太、初代

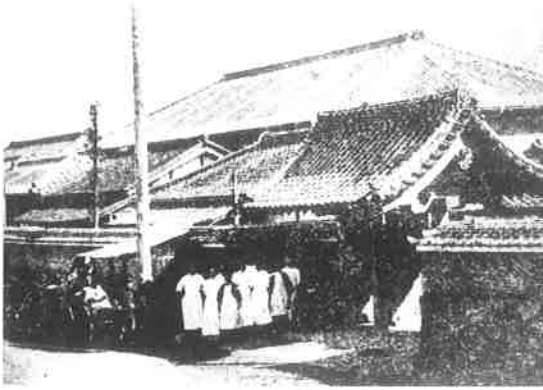


町田旦龍
〔町田旦龍〕(昭和16年)より

高知新聞社長の岡本方俊などの自由民権家や、その他医師達が陣営に参じていた。そして、この楠派には片岡健吉、山田平左衛門、西山志澄らの巨頭達が裏面で糸を引いていたものである。

町田派の中核であった横山兄弟は、郡部の医師達に呼びかけ、もし自由党幹部が楠派の要求を認めるならば、挙って自由党を脱会する決意を表明した。また、楠派の片岡健吉邸に西山志澄等が集まり、この問題を協議している最中に横山董が乗り込んで、同様の政治的圧力をかけるなどした。

(4) 「このため、楠派としては岡本方俊が上京し、板垣退助に指示裁断を仰ぐことにした。一方、町田派の横山らは、これに對抗して、誰かを上京せしめんと企てたが、適任者がなく、町田をも加えて横山ら三人は連署の上、医者することに政党が関与することの絶対不可なることを力説し、これを東京の板垣伯に送致した。それが奏功してかどうかは知らないが、板垣伯は岡本から仔細を聴取した上『俺はそんなこと処理することは出来ぬ。よろしく諮って郷土の輿論に聴従すべきである。』と頭から受けなかった。当時、医師の勢力信望は大したものがあつた。故に若



明治時代の楠病院
(写真集「明治大正昭和-high」(国書刊行会)より)

し郡部において、これら医師達が自由党を脱会するとなると、党勢上、大なる打撃を受けるのは必然のことであるから、板垣伯はもちろん、自由党の幹部連も、遂に楠派を支持し通すことを断念し、結局、軍配は町田派にあがったわけである。」と伝記には書かれている。

(5) 明治26年(1893)4月、県は高知県立病院の土地建物一切を町田に貸与する契約を結び、町田は「高知病院」の名称でこれを存続経営することになった。

一方、町田との経営権獲得競争に敗れた正任であったが、正興から引き継いだ楠病院を内科・外科・眼科・小児科産婦

7、終生結髪し古風を改めず

人科と逐次整備拡張し、高知県下最大の民間総合病院へと発展させ、また県市の初代医師会会長として高知の医療界に力を尽くした。

(1) 明治13年(1880)11月19日、正興は当時「城下の三名医」と称された山崎

立生、岡村景楼と協力して私立の医学学校「県立義塾」を開校し後進の養成に尽力した。この三人が義塾の三本柱だったことから考えて、学校は世人から相当の信頼を受けていたと想像される。しかし、明治16年(1883)に廃校と伝わるのみで、その理由は定かでない。また、県下にコレラが流行した明治12年(1879)には、山崎、岡村と共にコレラ予防演説会を開催し人々の衛生意識向上に努め、寝食を忘れて治療に奔走したという。

余談だが、寺田寅彦(地球物理学者随筆家)に「追憶の医師たち」という随筆があり、岡村景楼と楠正任の面影を今に伝えている。

(2) 明治20年(1887)5月17日「天命ヲ以テ終ル」とあり、正興は享年59歳の生涯を追手筋で閉じた。墓は故郷久礼田村

の寺山墓地にある。

正興は歿するまで、生涯結髪のまま過ごし古風を改めなかつたという。人となり温にして威あり、雅にして朴。患者に接するや懇切、病を診るや精妙、門前市を成す多忙の中で、漢籍に精通し、詩文俳諧を好んだ。後進を指導するには丁寧で門人270余人にのほり、医家として一家を成した者も多いという。

(3) 正興は冬季に山間から天然水を取り寄せ、追手筋の病院近くに城下で最初の「水室」を造り、夏季それを取り出して病人用、その他に供給した。これが本県の製氷販売の始めであったという。

また、薬用に供されたと思われる山桃(やまもも)酒や枇杷(びわ)の研究にも力を注いだ。明治9年(1876)に育てた枇杷(びわ)の品種は、正興の姓をとって現在でも「楠(くすのき)」という品種



高知城杉の段にある
「橋陰楠先生(正興)尚徳碑」

名で栽培され、千葉県では、その交雑品種が主流になっているという。

高知城杉の段では、明治22年(1889)に門人建石者53名によって建てられた「橘陰楠先生尚徳之碑」が今も訪れる人たちを迎えている。題額は陸軍中将従二位勲一等子爵・谷干城、書は元老院議官従三位勲二等・細川潤次郎である(官職・位階勲等は碑より転記)。

参考文献

- ・「高知県人名辞典新版」高知新聞社
- ・「炎の軌跡・土佐企業人物語」高知新聞社
- ・「山内容堂」平尾道雄
- ・「土佐医学史考」平尾道雄
- ・「土佐楠木氏研究」寺石正路
- ・「統一土佐偉人伝」寺石正路
- ・「土佐名医列伝」中島鹿吉
- ・「高知県医師会史」高知県医師会
- ・「史跡ガイド・土佐の自由民権」公文豪
- ・「町田且龍」町田昌直
- ・「久礼田小学校開校百周年記念誌」同記念誌発行委員会
- ・「ウイリアム・ウイリス伝」山崎震一
- ・「高知城を歩く」岩崎義郎

公文豪編『板垣退助伝記資料集』第一巻(幕末編)〜第一八巻(遺稿その他)の刊行予定について



明治20年頃の板垣(51歳時)
板垣はこの写真を大変気に入り、写真館に700枚注文し、党員に配ったといわれている。

一、はじめに

高知市立自由民権記念館は、二〇二〇(令和二)年度に開館三〇周年記念出版として、公文豪編『板垣退助伝記資料集』を刊行した。

同資料集は、板垣退助の全生涯にわたる資料をまとめた膨大なものであるため、全一八巻を六巻ずつ三年計画で刊行することとした。そして、二〇二〇年度には第一巻(幕末編)から第六巻(明治二〇年)まで、

高知市立自由民権記念館

二〇二二(令和三)年度は、第七巻(明治二一年)から第一二巻(明治三〇年)までを刊行し、二〇二三年(令和四)度は、第二三巻(明治三二年)から第一八巻(遺稿その他)までを刊行する予定である。

なお、本書に用いられた資料一覧数は、各種新聞資料を中心に約一六〇点にのぼっており、現段階での頁数は、全一八巻で約二二、〇〇〇頁、入力文字数は、一、〇〇〇万文字を優に超えている。

さて、伝記資料集といえば、本編五八編にも及ぶ『渋沢栄一伝記資料』がよく知られているが、伝記を書くための資料として編纂されたという点に加えて、同書と『板垣退助伝記資料集』には共通したものがある。それは、その人物の残した事蹟があまりにも多いため、どのような伝記が刊行されても充分ではないという前提の上に編纂されていることである。

板垣に関する伝記といえば、明治期では『板垣退助公傳 南の海自由旗揚』(明治一三年)、『前参議 板垣公武勇伝』(明治一三年)、『民権泰斗 板垣君近世紀聞』(明治一五年)、『東洋自由の魁』(明治一五年)、『板垣退助君伝 第一卷』(明治二六年)等がある。さらに昭和期になると『板垣退助全集』(昭和八年)、『板垣退助』(昭和二六年)、『史伝板垣退助』(昭和四九年)、『板垣退助 自由民権の夢と敗北』(昭和六三年)等があり、最近では『板垣退助君伝記 第一卷』、『第四卷』(平成二二年)、『板垣退助 自由民権指導者の実像』(令和二年)があるが、ここに挙げたいずれの書籍も板垣の八三年に及ぶ生涯を記したものでない。

なかでも『板垣退助君伝記 第一卷』、『第四卷』は、四〇〇字詰で五、〇〇〇枚を超える毛筆原稿を残し、一九三〇(昭和五)年に急逝した宇田滄溟の遺志を引き継ぎ、編者(公文豪氏)が八〇年の時を超え復刊させたものである。しかし同書は、一八九八(明治三二)年頃まで(板垣六二歳時)を描いた未完の大著であった。そして、この未完の伝記を五年間かけ、二〇〇九(平成二二)年に刊行した編者は、ためらうことなく次のミッションへ移行した。

編者は、同書刊行以後も、板垣関係資料の収集を継続し、板垣の政界引退後、晩年を社

会改良運動に捧げ、八三歳で天寿を全うするまでの全生涯に関係する伝記資料集を刊行するというミッション実現に向け、さらに一〇年以上を費やし、編纂活動を続けてこられた。

まとめられた資料集は、OCR(光学的文字認識)などのパソコン機能を利用したものではなく、ほとんど独力で、一、〇〇〇万字以上をパソコンに手打ちしたものであり、いままさらながら編者の忍耐力、集中力の高さ、そして熱き研究者魂に、記念館職員一同、頭が下がる思いがした。

なお、同書の完結は、来年二〇二二年度となるが、『板垣退助伝記資料集』の全巻の主な内容等について、次に紹介しておきたい。

二、二〇二〇年度第二回配本について

『板垣退助伝記資料集』二〇二〇年度第一回目の配本は、第一卷(幕末編)から第六卷(明治一六年〜明治二〇年)までの六巻セット販売となっており、税込一八、〇〇〇円、分売不可である。総頁数は、三、六〇九頁となり、一頁は八九三文字程度であり、全体文字数は、約三二二万文字となる。

第一卷は「幕末編」として一冊にまとめられており、頁数は四五四頁、天文八(一五三九)年から慶応三(一八六七)年、板垣が生まれて



【板垣退助遭難の図】

これは、1887(明治20)年頃、『今日新聞』に連載された坂崎紫瀾著『板垣退助詳傳』の挿絵(号数不明)である。切抜のみで原紙は発見されていない。(高知県立図書館蔵)

から三二歳までの資料がまとめられている。

同巻に用いられた主な資料名は、『甲陽軍艦』、『南路志』、『板垣退助君伝』、『保古飛呂比・佐佐木高行日記』、『片岡健吉日記・家内年鑑』、『御侍中先祖書系圖牒』、『鯨海酔候』、『伯爵後藤藤象二郎』、『寺村左膳道成日記』、『岩倉公実記』、『谷干城遺稿』、『土佐藩政録』、『武市瑞山関係文書』、『維新土佐勤王史』等である。

内容概略は、家系と生誕、盛組、安政の大獄、桜田門の変、吉田東洋暗殺、勤王派への弾圧、中岡慎太郎との意気投合、水戸浪士の土佐藩邸隠匿、薩土武力討幕の密約、大政奉還、土佐藩軍制改革と別撰組、連署組の構陷、中

岡慎太郎・坂本龍馬暗殺、王政復古の号令等についてである。

第二巻は、全体で六三二頁あり、慶応四・明治元（一八六八）年から明治五（一八七二）年、板垣三二歳から三六歳までの資料がまとめられている。

同巻に用いられた主な資料名は、『維新土佐勤王史』、『戊辰日記』、『岩倉公実記』、『土佐藩政録』、『谷干城遺稿』、『東征記』、『東征私記』、『板垣退助君伝』、『太政官日誌』、『法令全書』、『会津戊辰戦史』、『岩崎弥太郎日記』、『保古飛呂比・佐佐木高行日記』、『木戸孝允日記』、『伯爵後藤象二郎』、『金陵会議』、『明治史要』、『神山郡廉日記』、『伊藤博文関係文書』、『西南紀伝』、『奥宮慥齋日記』等である。内容概略は、東山道総督府参謀、東北転戦会津攻略、版籍奉還、金陵会議、高知藩制改革、板垣谷干城の対立、人民平均の理、御親兵献上、廃藩置県、参議就任、岩倉遣欧使節団と留守政府等についてである。

第三巻は、全体で六六三頁あり、明治六（一八七三）年から明治一〇（一八七七）年、板垣三七歳から四十一歳までの資料がまとめられている。

同巻に用いられた主な資料名は、『岩崎弥太郎日記』、『明治史要』、『自由党史』、『西南紀伝』、『木戸孝允文書』、『松菊木戸公傳』、『

宇田友猪「板垣退助君伝記」、『岩倉具視関係文書』、『伊藤博文関係文書』、『大久保利通文書』、『法令全書』、『公文録』、『保古飛呂比・佐佐木高行日記』、『立志社始末記要』、『奥宮慥齋日記』、『林有造氏旧夢談』、『大久保利通日記』、『日新真事誌』、『植木枝盛日記』、『明治政史』、『福澤諭吉全集』、『片岡健吉日記』、『土陽新聞小歴史』、『南海記行』等である。内容概略は、明治六年の政変（征韓論の破裂）、愛国公党結成、民撰議院設立の建言、佐賀の乱、立志社創立、立志社の事業、愛国社結成、大阪会議と参議復帰、明治八年の詔勅、板垣の再下野、士族反乱と百姓一揆、西南戦争と立志社拳兵計画、立志社建白、言論戦の開始、河野広中來高等についてである。

第四巻は、全体で五一六頁あり、明治一一（一八七八）年から明治一三（一八八〇）年、板垣四二歳から四四歳までの資料がまとめられている。同巻に用いられた主な資料名は、『保古飛呂比・佐佐木高行日記』、『大坂日報』、『立志社始末記要』、『植木枝盛日記』、『城泉太郎日記』、『伊藤博文関係文書』、『東京曙新聞』、『土佐自由民権運動資料集』、『朝野新聞』、『竹内綱自叙伝』、『郵便報知新聞』、『明治史要』、『南遊日誌』、『片岡健吉先生傳』等である。

内容概略は、大久保参議暗殺、高知大獄の判決、民権結社、女性参政権、愛国社再興、土佐州会、高知県会開設、国会開設運動の展開、国会期成同盟創立、集会条例制定、国会開設願望書の却下、共行社の分離、甲州遊説等についてである。

第五巻は、七一〇頁あり、明治一四（一八八一）年から明治一五（一八八二）年、板垣四五歳から四六歳までの資料がまとめられている。

同巻に用いられた主な資料名は、『高知新聞』、『大阪日報』、『立志社始末記要』、『朝野新聞』、『保古飛呂比・佐佐木高行日記』、『東京曙新聞』、『明治文化全集・正史篇』、『明治史要』、『東洋自由新聞』、『竹内綱自叙伝』、『植木枝盛日記』、『伯爵後藤象二郎』、『坂崎紫瀾「東北載筆録（高知新聞）」』、『新聞集成明治編年史』、『谷紀百「東北周遊紀行（大坂日報）」』、『雪月花』、『黒崎町史』、『自由党本部報』、『土佐自由民権運動裁判記録』、『明治政史』、『日本立憲政党新聞』、『伊藤博文傳』、『公文別録』、『東京横浜毎日新聞』、『伊藤博文関係文書』、『高知県自由党沿革』、『愛知新聞』、『板垣君欧米漫遊日記』等である。

内容概略は、東北遊説、北海道開拓使払下事件、明治一四年の政変、自由党結成、総理就

任、日本酒屋会議、立憲改進黨など諸政党勃興、岐阜の兇變、板垣洋行問題等についてである。

第六巻は、全体で五一六頁あり、明治一六（一八八三）年から明治二〇（一八八七）年、板垣四七歳から五一歳までの資料がまとめられている。

同巻に用いられた主な資料名は、『伊藤博文関係文書』、『自由新聞』、『土倉家文書』、『土陽新聞』、『土佐新聞』、『立志社始末記要』、『高陽新報』、『植木枝盛日記』、『自由民権機密探偵資料集』、『日本立憲政党史』、『自由新聞』、『雪月花』、『自由党史』、『弥生新聞』、『片岡健吉日記』、『高知教会百年史』、『自由燈』、『城泉太郎日記』、『蘇峰自伝』、『板垣退助君伝記』、『浪華新聞』、『伊藤博文伝』、『毎日新聞』、『めざまし新聞』、『今日新聞』、『高知県民情一斑』等である。

内容概略は、板垣・後藤帰朝、朝鮮改革運動、有二館開館、激化事件、自由党解党、高知での生活、徳富猪一郎来高、板垣辞爵事件、三大事件建白運動と保安条例等についてである。

三、二〇二二年度第二回配本について

『板垣退助伝記資料集』二〇二二年度第二回目の配本は、前年同様、第七巻（明治二二年



「国会を夢見る板垣退助」
『今日新聞』挿絵（号数不明）（高知県立図書館蔵）

（明治二二年）から第一二巻（明治二九年、明治三〇年）までの六巻セット販売となっております。税込一八、〇〇〇円、分売不可である。総頁数は、四、〇〇六頁となり、全体文字数は、約三四〇万文字となる。

第七巻は、全体で六〇二頁あり、明治二二（一八八八）年から明治二二（一八八九）年、板垣五二歳から五三歳までの資料がまとめられている。

同巻に用いられた主な資料名は、『土陽新聞』、『朝野新聞』、『読売新聞』、『植木枝盛日記』、『東京朝日新聞』、『伊藤博文関係文書』、『国民之友』、『東雲新聞』、『片岡健吉日記』、『時事新報』等である。

内容概略は、後藤象二郎と大同団結運動、時任高知県知事の赴任、浦戸港口閉塞問題、大日本帝国憲法の発布・大赦令、後藤入閣と大同団結の分裂、相原尚斐出獄、大隈条約改正反対運動、旧友懇親会等についてである。

第八巻は、全体で五九七頁あり、明治二三（一八九〇）年、板垣五四歳時の資料がまとめられている。

同巻に用いられた主な資料名は、『東京朝日新聞』、『東雲新聞』、『原敬日記』、『土陽新聞』、『植木枝盛日記』、『片岡健吉日記』、『神戸又新日報』、『讃岐日報』、『海南新聞』、『国民新聞』、『朝野新聞』等である。

内容概略は、政社・非政社派と愛国公党、庚寅倶楽部結成（三派合同）、立憲自由党の成立、第一回衆議院議院選挙、帝国議会開設等についてである。

第九巻は、全体で六三五頁あり、明治二四（一八九一）年、退助五五歳時の資料がまとめられている。

同巻に用いられた主な資料名は、『朝野新聞』、『自由新聞』、『東京朝日新聞』、『伊藤博文関係文書』、『立憲自由新聞』、『谷千城遺稿』、『土陽新聞』、『自由党々報』、『龍野周一郎日記』等である。

内容概略は、第一期帝国議会における「土佐派の裏切り」、自由党総理就任、自由新聞社の内紛、大津事件、東北・北海道遊説、板垣・大隈の連携と第二期帝国議会、衆議院解散等についてである。

第一〇巻は、明治二五（一八九二）年から明治二六（一八九三）年、板垣五六歳時から五七

歳までの資料がまとめられているが、頁数の関係上、明治二六（一八九三）年一月から一〇月までを第一〇巻、同年十一月から十二月までを第一一巻へと、やむをえず分冊することとした。分冊後の頁数は六七七頁である。

同巻に用いられた主な資料名は、『自由党々報』、『時事新報』、『官報』、『明治二十五年高知県臨時総選挙暴動彙報』、『朝野新聞』、『毎日新聞』、『東京朝日新聞』、『土陽新聞』、『伊藤博文関係文書』、『龍野周一郎日記』等である。

内容概略は、選挙大干渉、植木枝盛逝去、板垣・大隈両伯告発事件、大井憲太郎等の脱党、西日本遊説、四年ぶりの帰県、相馬事件と星亨等についてである。

第一一巻は、全体で七二四頁あり、分冊された明治二六（一八九三）年一月・二月から明治二八（一八九五）年、板垣五七歳から五九歳までの資料がまとめられている。

同巻に用いられた主な資料名は、『自由党々報』、『土陽新聞』、『東京朝日新聞』等である。

内容概略は、衆議院議長星亨の議会除名、自由党の苦難、臨時総選挙と自由党の躍進、日清戦争と三國干渉、閔妃暗殺、伊藤内閣との提携等についてである。

第一二巻は、全体で六六四頁あり、明治二九（一八九六）年から明治三〇（一八九七）

年、板垣六〇歳から六一歳までの資料がまとめられている。

同巻に用いられた主な資料名は、『自由党々報』、『土陽新聞』、『東京朝日新聞』等である。

内容概略は、板垣内務大臣就任、三陸大海嘯、伊藤内閣の倒壊、松方内閣の成立、河野広中脱党、後藤象二郎逝去、東海北信遊説、松方内閣との提携をめぐる党内対立、第三次伊藤内閣成立等についてである。

四、二〇二二年度第三回配本予定について

二〇二二年度に予定している『板垣退助伝記資料集』第三回目の配本は、前年同様、第二三巻（明治三二年～明治三三年）から第一八巻（別巻）までの六巻セット販売となっており、税込一八、〇〇〇円、分売不可の予定である。総頁数は、現在の見込では三、七四五頁となり、文字数は、約三三四万文字となる。

第一三巻は、全体で五三二頁見込であり、明治三一（一八九八）年、板垣六二歳の資料がま

とめられている。

同巻に用いられた主な資料名は、『伊藤博文関係文書』、『東京朝日新聞』、『自由党々報』、『片岡健吉日記』、『伊藤博文伝』、『原敬日記』、『憲政党党報』等である。

内容概略は、憲政党創立（自由進歩両党合同）、隈板内閣の成立と崩壊、憲政党分裂、山縣内閣との提携についてである。

第一四巻は、全体で六七四頁見込であり、明治三二（一八九九）年から明治三五（一九〇二）年（一月～六月）まで、板垣六三歳から六六歳までの資料がまとめられている。

同巻に用いられた主な資料名は、『東京朝日新聞』、『土陽新聞』、『万朝報』、『憲政党党報』、『原敬日記』、『大阪毎日新聞』、『片岡健吉日記』、『時事新報』等である。

内容概略は、四国九州遊説、政界引退、同気倶楽部、立憲政友会創立、憲政党解党大会、星亨暗殺、西郷従道との風俗改良遊説、高知政界の紛擾についてである。

第一五巻は、全体で六〇六頁見込であり、明治三五（一九〇二）年（七月～十二月）から明治三八（一九〇五）年、板垣六六歳から六九歳までの資料がまとめられている。

同巻に用いられた主な資料名は、『土陽新聞』、『片岡健吉日記』、『伊藤博文関係文書』、『原敬日記』、『政友』、『東京朝日新聞』、『太



「狩獵を楽しむ板垣退助」
『今日新聞』挿絵（号数不明）
（高知県立図書館蔵）

陽」等である。

内容概略は、板垣調停の失敗、加藤高明高知選挙区当選受諾と交渉顛末の公表、海南倶楽部の結成、『友愛』発刊、片岡健吉逝去、日露戦争、『高知新聞』創刊についてである。

第一六巻は、全体で六〇六頁見込であり、明治三九（一九〇六）年から明治四二（一九〇九）年、板垣七〇歳から七三歳までの資料がまとめられている。

同巻に用いられた主な資料名は、『土陽新聞』、『東京朝日新聞』、『史学雑誌』、『政友』、『社会政策』、『栗原亮一皆無庵遺響』等である。

内容概略は、社会改良会結成、一代華族論争、板垣への土陽新聞社譲渡、無形会、国技館の誕生、伊藤博文暗殺についてである。

第一七巻は、全体で六五七頁見込であり、明治四三（一九一〇）年から明治四五（一九一二）年、板垣七四歳から七六歳までの資料がまとめられている。

同巻に用いられた主な資料名は、『土陽新聞』、『高知新聞』、『社会政策』、『原敬日記』等である。

内容概略は、最後の帰高、『自由党史』刊行、日韓併合、谷干城逝去、『社会政策』発刊、土陽新聞社横領事件についてである。

第一八巻は、全体で六七〇頁見込であり、

大正元（一九一二）年から大正八（一九一九）年、板垣七六歳から死去した八三歳までの資料に加え、付録として板垣の遺稿その他をまとめている。

同巻に用いられた主な資料名は、『台湾日日新報』、『東京毎日新聞』、『台湾社会運動史』、『政友』、『東京朝日新聞』、『都新聞』等である。

内容概略は、太刀山会、社会改良論の展開、台湾同化会、戸主選挙法の提唱、板垣退助逝去、付録として国民への遺著といわれる『立国の大本』や『神と人道』、『自由新聞』連載の『国会論ノ始末』等を予定している。

五、おわりに

本資料集は、単に板垣個人の行動記録をまとめたものではなく、幕末から明治、大正にかけての政治的・社会的情勢を俯瞰し、板垣の広範囲にわたる活動や知られざる哲学と思想に迫ることができる構成となっている。そして、この資料集の刊行により、板垣研究のこれまでの課題を克服し、「歴史に遺し、刻んだ板垣退助の正・負両面の（客観的）検証・論証」（安在邦夫「板垣退助研究の現状と課題」）が初めて可能となるのである。

記念館職員一同、一丸となって校正作業に取り組んだ本資料集の刊行は、高知市立自由

民権記念館開館三〇周年を記念する出版物として最もふさわしいものであり、出版による研究波及効果は、計り知れないものがあることを確信するものである。

編者は、本書第一巻序で「本書編集は、近代資料の宝庫・高知市立自由民権記念館の存在なくしてあり得なかった」と述べられている。このように記念館は、全国でも数少ない日本近代史をテーマとした歴史博物館として、近代史に関する資料を幅広く収集し、教育、学術及び文化の発展に資するため、今後とも活動していきたい。

（高知市立自由民権記念館）



「文豪ピクトル・ユゴーとの会見」

『今日新聞』挿絵（号数不明）（高知県立図書館蔵）

コロナ禍の中での板垣退助顕彰活動 ——板垣山墓地標柱杭設置など——



板垣退助玄孫 高岡 功太郎

令和二年、三年はコロナ禍の中で、我々の板垣退助顕彰事業も多くの影響を受けた。

具体的には令和二年十一月三日の旧明治節では、桃山御陵参拝団より直々に御指名を賜り正式参拝の後の桃山御陵麓前で『明治大帝と板垣退助伯』と題する記念講演を依頼されていたが、時下疫病蔓延の余波を懸念し急遽中止となった他、各種板垣伯顕彰の勉強会も軒並み中止・延期の措置を取らざるを得なかった。

大村益次郎先生の生誕地、山口県の鑄銭司ではかねてより大村益次郎先生像の建立事業があり、板垣顕彰会からも資金を拠出して応援していたが、除幕式はコロナ禍の影響で他府県からの出席はストップの措置が取られた。また、高知縣護國神社の創建百五十年記念大祭も延期の措置が取られ、現時点（本原稿執筆時）で挙行の用途は立っていない。思えばそ

の前の年、平成三十一年令和元年は、板垣百回忌記念書籍の出版や、京都祇園「薩土討幕之密約記念碑」の建立、また天皇陛下御即位奉祝式典では実行委員として従事出来たこと等と比して、コロナ禍以降は総てにおいてブレーキが掛かったかの様に成らざるを得なかったこの二年であった。その代り、人との交流を抑え地道に取り組める課題を一つ一つ仕上げて行く事となった。昨年、板垣の遺著『立國の大本』の現代語訳を完成させたのもその一つである。その中で、今春は高知の板垣山墓所に高知県のご好意によって駐車場が整備されたとの報が寄せられた。これは実に高知板垣会が約十年來、地道な活動を続けてこられたものが実を結んだものであろう。

駐車場には板垣山を含む高知市内の自由民権関連各所の所在地を示す案内地図が設

置されたが、高知板垣会が板垣伯百回忌を記念して建てた「板垣退助謫居の地」の石碑の所在地や、乾家二代目・乾正行の墓のある安楽寺、迅衝隊の出陣地・致道館、同じく迅衝隊士の御霊を斎き奉る高知縣護國神社などのゆかりの地が遺漏し、また板垣山の案内地図、由来を示す案内板は設置が見送られた様であった。利便性が向上し折角墓所へお越しになられても「板垣退助の墓は分かったけど他の古い墓は誰が誰だか分からない」では申し訳ない。何故この場所に板垣の分骨（分霊）墓が作られたのか、板垣退助という人物を生み出した家族は如何なるものであったのか、土佐藩の歴史、板垣家乾家の歴史を含めて広く知って頂ければとの思いがある。例えば、板垣退助の三男板垣孫三郎の墓は板垣山にあるが、その真横にある「板垣退助夫人・鈴の墓」は孫三郎の母では無い。孫三郎の生母・絹子夫人は東京品川にある。東京の絹子夫人の墓の傍らには四男・正實、五男・六一の墓がある。嫡男・銚太郎の長男・武生の墓もそこに並んで立てられているが、銚太郎の生母は板垣山に墓のある鈴夫人で、品川にある絹子夫人では無い。事情を知らない人が見れば、直ぐ近くにある退助夫人の墓が生母だと思ってしまうだろうか。因みに退助次男・正士の墓は昭和四十五年高知から改葬され、大阪池田の五月山にある。

銚太郎の次男の守正の墓は静岡の富士霊園、三男の正貫の墓は東京の清岸院にある。ところが、昨今の印刷媒体では「正實」を「正美」と誤記し更に「正實」と「正貫」を取り違えて同人のように表記したり「四男」を「次男」と書いてあったりと非常に杜撰で、またその孫引きまでもよく見かけるようになった。さらに「高知の安楽寺には乾家（板垣家）初代から三代までの墓があり、四代目からは板垣山にある」と誰から聞いたものか書かれているものまであったが、これなどは全く事実誤認で初代、三代、四代：は板垣山にあり、二代目だけが安楽寺にある。これらは親族にも確認せず、同時代に建てられ誰もが足を運べば確認が出来る墓石すら確認せずに記事を書いている書籍が蔓延しているからで、極めて憂慮すべき事態ではないか。

その為、第九十九回忌の年（平成二十九年）の七月十六日、我々は百回忌記念事業の一環として墓所内へ標示板と標柱の設置等の整備を行ったが、この時は予算と百回忌準備に手一杯で、ラミネート加工した簡易の仮標柱杭を設置するのが精一杯であった。いずれ本腰を挙げて設置したいと考えていたが、この四年間、風雨に晒され仮設置の標柱杭は傷みが生じていた。そこで、本年の取り組みは、この令和

三年春の板垣山駐車場整備を記念し、弊会では浄財を募り墓所内の標柱杭を新調し敷設することを各位の賛同を得て決議したのである。標柱杭設置当日の状況に関しては既に令和三年七月十七日付の「高知新聞」に載ったのでお読み下さった方も多くおられると思うが、その内幕と所懐の一端を記したいと思う。

板垣山墓所の標柱杭作製

業者に見積りを依頼すると、設置費込みでざっと二百万円かかるとのこと。業者へ依頼するのを断念。文字も印刷のような字体では無味乾燥として味気なく、そうかと言って書家に依頼すれば、それなりの金額を負担せねば良いものは出来ない。我々のように非営利で国家に尽した義士たちを顕彰している団体と、営利目的の業者とは隔世の感がある。…ならば、木材から発注して我々の手で作り「豪華



標柱杭作製

ではないかもしれないが、心のこもった物を作ろうではないか」と相成った訳である。墓所にある墓石は三十三柱余。隣接する乾家ゆかりの北原羽左衛門家の墓も含めると四十柱余。今回は総てには手が回らない為、とりあえず二十四柱分を作成。耐久性と防水の為の油性ペンキを塗り重ね、乾いてはまた塗るという作業に着工したが、令和三年五月九日。折からの梅雨で、天候を見計らい、乾燥などの期日も考慮しながら作業を進めた。

岐阜東照宮の社殿完成

その間、岐阜では岐阜東照宮の社殿が完成し、六月一日を以て完成を祝して例大祭を挙行するとの御案内を頂いた。これは岐阜板垣会会長・故澤田榮作氏が、戊辰戦争の時に日光東照宮を戦災から守った板垣退助の行動に感銘を受け岐阜東照宮奉賛会を立ちあげられた成果である。戊辰戦争の中での彼の行為は板垣精神の萌芽とも言える顕著な例ではないか。そこで、我々は標柱杭を作成する傍らこの慶事を奉祝し、式典当日に皆様へお渡し出来るよう、板垣と日光の由縁を集め『日光東照宮と板垣退助』と題した冊子を編纂する事となった。式典は六月一日、板垣の命日は七月十六日、二つのメ切を目標に、コロナ禍の中で出来得る事を模索し寸暇を惜しんで作業

を進めた。結局、標柱の題字は小生自身が揮毫する事となった。さらに標柱は角材で四面ある為、折角ならばと一柱一柱、側面に小伝を記載する事となった。「弘法は筆を選ばず」と言うけれども、凡夫たる小生にとって細筆にペンキで文字を書くのは中々難しい。試行錯誤しながらの作業であった。

予測不能な状況での準備

六月一日の東照宮完成式典は快晴の中、水戸徳川家第十五代御当主・徳川斉正さまをはじめ来賓各位御臨席のもと恭しく神事が執り行われ、小生も謹んで太玉串を捧げた。さて、次なる目標の標柱杭完成までは残り一ヶ月半。この時点で、コロナ禍の余波を受けて東京オリンピックも開催出来るのか微妙な状況。板垣の命日法要も挙行されるのかをも不明瞭な中であつた為、我々は二つの方策を用意した。一つは、無事に法要が行われ、関係各位と一緒に関柱杭を設置する案。もう一つは、法要が開かれず、式典も無い形で標柱を設置する案。板垣退助四女・千代子さまのご子孫にあたる浅野造史氏に連絡を取ると法要の有無に関らず高知へお越し頂けるとの事であつた。ただ、時勢を見定めご留意くださる様お話をし、かつ我々はこれを励みに、命日前日の七月十五日設置を目標として製作にあつた。

た。結論としては、本年はコロナ禍の影響を配慮し、板垣会としての命日法要は異例の延期となった。小生も例年ならば、全国から有志を引き連れての帰高であつたが、本年は万事予測不能な年となった。弊会各位には予め御了解を頂き、時勢を鑑み法要の案内状の送付も控え、その旨をウェブサイトで告知した。

標柱設置作業と新聞取材

小生は板垣命日前日の七月十五日、三密を避けて帰高。高知では板垣会・島崎順也氏に各種工具一式、運搬、設置等々にご盡力頂いた。島崎氏は、明治の自由民権家・島崎寅彌(修立社)氏の令孫にあたられる。歴史と奇



標柱設置された板垣家墓地

縁を感じながらお話しを交え板垣山へ。天気予報では「雨」とあつたが、幸にも我々が板垣山の山頂に着いた正午頃から晴天となり、般若心経を暗誦の後、板垣退助の分霊墓に小生が「初鋏」を入れ一柱目の標柱を設置。作業途中、高知新聞社からの取材あり、板垣山の由来や今回の作業工程及び、板垣退助百回忌記念事業に関する内容を記者さまへご説明。その後、作業を続行し最後の一本を残してその日は作業を終了。再び般若心経を暗誦下山した。

板垣退助第百三回忌

翌令和三年七月十六日は、浅野造史(板垣



筆者(高岡功太郎)と浅野造史氏

退助玄孫)氏を高知駅でお迎えし板垣山へ。涙雨のそぼ降る中、墓前で般若心経を挙げ、退助生母林幸子の墓石の標柱杭に「メ打ち」をして頂き、昨日からの一連の標柱杭設置作業を完了した。帰路、比島の龍乗院へ立寄り退助生家の門をご案内。さらに、安楽寺の板垣家土佐二代目・乾金右衛門正行夫婦の墓所へお参りしてから、高野寺へ車を馳せ揃って菩提寺の仏前に御参りし香華を手向けた。本年はコロナ禍のため異例の板垣会としての法要は延期となったが、これを以つて、命日法要の代りとし故人の偉業を偲ぶ日となった次第である。

〔板垣山墓地に關しましては、今後も今回敷設出来なかつた残り約十本分の標柱杭の作製、板垣山墓所の地図と由来を説明する案内板の作製、欠損墓石・地盤の修復など課題があり、引続き皆様に御協賛・御支援を募っております〕

高松藩、苦悩の日々 ― 戊辰の役 板垣隊の進軍雑話 ―



菊池寛の一言

戦前の話である。香川県高松市出身の作家・菊池寛(「文藝春秋社」社長)が土佐(「文化講演会」)で来たことがある。その時は、彼は開口一番

「私は土佐が嫌いである。高松は、穏やかな、柄の良い、平和な国民である。その国民を土佐は、二回にわたつて蹂躪し、ひどい目に会わせた。一人は長宗我部元親だ。もう一人は板垣退助だ。だから私は終生、土佐だけは来たくなかつた。しかし、今日図らずも、こうして来た。」

という意味の言葉を発したという。聴衆一同シユンとなつたが、その時の思い出を伝言で聞いた記憶がある。なるほど、高松人の市民意識としては、当時は当然のことであつただろう。

「戊辰の戦」と板垣(当時は乾)ひきいる土佐

高知・板垣会副会長 谷 是

軍の〃四国山脈・山越えの話は、第七号に書いたことがあるから、ここではくり返さない。今回は、その時の高松藩の事情を少し述べてみたいと思う。

〃朝敵〃というレッテル

慶応四年(一六六八)一月三日、「鳥羽、伏見の戦」が起こつた。京都から大阪城に下つていた旧徳川幕府軍が、京都御所を固めていた薩摩、長州軍に向かつて、進軍を始めたことだ。幕府側は数こそ大きかつたが、それを統御して指揮する人材に乏しく、大半の藩は〃様子見〃ばかり。それを予測していた薩摩の大砲などに反撃され、負け戦となつた。総崩れとなつた幕府軍は大阪城に引き揚げて来たが、將軍徳川慶喜は、口でこそ一同に督励したが、実は抗戦の気持がなく、夜半秘かに、一部の家臣を

連れて、大阪港から脱出、江戸に向かつて逃走した。幕府方は士気も失せ、みじめな敗戦となったが、これは歴史が示す通りである。

この結果、朝廷から、会津、桑名、高松、松山、大垣、姫路藩に対して、朝敵とみなす追討令が出た。その時、高松藩は、藩主松平頼聡は間に合わず、兵庫辺りにいたという。幕府の歩兵奉行・佐久間近江守の配下で家老・小夫兵庫正容(四二歳)と小河又右衛門久成(二七歳)にひきいれられ、小銃隊八小隊、大砲六門で参加、藩士三百名ほどであった。

高松藩は親藩で、水戸藩の徳川光圀の兄頼重を藩祖として十一代続いた家。乱世の時には、外様の土佐や阿波藩に睨みをきかせるために置かれた藩だ。水戸の支藩といっても良かった。そのため人間も、がんじがらめに、水戸との縁組が続く、慶喜側につくことは、当然のこと。敗戦がわかると、藩士一同は、ほとんど戦争らしいこともせず、大阪藩邸を打ち捨て、海を渡り、高松の玉藻城に帰って来た。さて、今後を、どうするか。高松の最も苦難な十日間が始まった。連日、玉藻城にはかかり火がたかれ、家臣一同総登城をかけ、抗戦か恭順かの大激論が毎日続いた。

新海援隊の任務

この頃、京、大阪にあったのが、海援隊である。坂本龍馬の死後、副隊長であった長岡謙吉を隊長として、数十名が残されていたが、海に習熟している隊だと新政府に認められ、瀬戸内海の島々を統轄、管理する命を受けた。長岡を長として、八木彦三郎(宮地)・島村要(土岐真金)・波多彦太郎・桂井隼太・勝間桂三郎、岡崎恭助、橋詰啓太郎、島崎兼吾、武田保輔、堀謙司、得能猪熊、島田源八郎、長岡謙次郎らである。伊吹周吉(石田英吉後の高知県知事)も一緒に、小豆島まで来たが、鳥羽、伏見の戦況を長崎にいる同志に伝えるため、草壁港



新海援隊士・波多彦太郎、玉藻城動向探索の図

から単身、九州へ走り、他の一向は、秘かに高松に接近したのである。彼達への命令の大きなものは、高松がどう動くか。抗戦か恭順かの様子をいち早く握って、土佐藩に連絡するところが、大きな任務であった。豪胆な波多彦太郎は、単身船に乗り、玉藻城の石垣近くまで接近し、その様子を探ったといわれる。それで、長岡、八木、波多などは海岸伝いに丸亀まで来て、丸亀城内の勤皇家・土肥大作や、板垣の土佐軍にも情報を伝えたというから、土佐人同士の活躍もめざましかった。

軍使の一報

この高松の苦境をいち早く知って心配した人物がいた。同藩出身の大阪の学者・藤沢南岳である。南岳は父東咳の時代から「泊園塾」を大阪で開いており、当時有名な儒学の塾であった。「これは大変だ。我が藩は、対応が間違っていた。どうしたら良いか。」いち早く、教え子の伝で薩摩の軍監・大山格之助(綱良)に会いに行き、相談した。「そうよなあ。あの第一次長州征伐の時、三人の現場指揮をやった家老が切腹をして、藩が残ったという前例がある。御藩の場合も、藩主がその場に居ず、二人の家老が指揮をとったから、現場責任者に責任をとらしたら、藩は残るかもしれない。」という言葉

を得た。「よっしゃ、それしかない。」と南岳は即断し、早船で讃岐へ帰国、玉藻城に参内して、その案を伝えた。

しかし何といつても戦時である。こんな時には、勢のある藩士たちが大半で、抗戦論一辺倒である。「お前のような学者風情に、政治がわかるか。」という声がほとんどで、そんなことを主張する「お前が腹を切れ。」と詰め寄られる按配であつた。

論議は毎日、永々と続き、決着がつかない。勢のある若い藩士達は、親藩の責任を主張し、今こそ、その役割を果たすべきだと力説する。ついに、藩主の叔父である、勤皇派の松平金岳が「それほど、お前達が戦争をしたければ、俺の首をとってやれ。俺が戦争の門出になつてやる。その上でやれ」という発言まで出され、会議は、混迷を極めた。

このような非常時には、藩主頼聡の判断が大事である。高松市街の御坊町に安養寺という寺があつた。この寺の僧、撰行と親しかったと見えて、彼を呼び、密命があるか、正して来いと命じたのである。撰行は「お国大事」と夜半早船で上京し、情報を集めたが、岩倉具視辺りの意向も探つたというから、さすがは軍使である。「まあ、そういう前例がない

わけではない。」という言質を得て、山崎周祐という浪人と共に帰国報告した。この一報かどどくや否や、抗戦の藩論がぐるり一転して、恭順という一点に統一されたのである。

家老の犠牲

気の毒なのは二人の家老だ。一月十八日、小夫兵庫は正覚寺で、小河又右衛門は弘憲寺で「何事もお国の為ぞ」と言われて、切腹をした。藩では二人の首を白布で包み、本州にいる薩摩の軍監のところへ、早船でとどけて、藩の存続を懇願する一幕となつた。

土佐軍は、総督・深尾丹波、参謀、大隊長板垣退助ら六百名に、丸亀藩三百名、多度津藩百名を加えて千名となり、高松藩に迫つたのが一月二十日のこと。丹波の従姉妹が、高松藩の家老大久保飛騨の妻であつたので、和談も



二家老切腹の図

しやすいという、縁を考へての軍令であつたと言ふ。板垣ら一行が高松の西浜の真行寺に布陣したとき、玉藻城内では恭順と決まり、もう藩主松平頼聡は浄願寺に謹慎、藩士達は、抵抗の意志のないことを示して、元結を切り、ざんばら髪であつた人もいた。板垣は真行寺の蘇鉄の脇に、坂出の鳥坂で、本山只一郎から受け取つた「錦の御旗」を立てて、玉藻城の空を向けて、空砲を打つた。形式上、攻撃したことを表示して、隊列を組んで、入城した。板垣は、玉藻城の管理、統御は深尾に一切をゆだね、自分は一刻も早く、兵を京、大阪に進めなければならなかつた。京都で前藩主山内容堂が待つてゐる。瀬戸内海を早く渡り、上京することが、眼目であつた。以上のように、戊辰の役では、幸いなことに、板垣は、四国では一兵たりとも損ずることなく、平和裏のうちに、京・大阪に出ることができた。彼にとつて真に幸せな、歴史上の事実であつたと言えるだろう。

(了)

参考文献

「讃岐人物風景 9」幕末から維新へ（四国新聞社編）
「讃岐人物風景 10」維新の旗手たち（四国新聞社編）

「わが町の歴史・高松」市原輝士・宮田忠彦（文一総合出版）

事務局だより

かねて当会からも、高知市に対して陳情していた、高知市薊野・通称「板垣山」にある板垣退助一族の墓所北側に、駐車場が完成。今春三月二十三日、楠、小笠原、谷ら役員と、尽力いただいた会員・島崎順也氏が訪問。三台ばかり収容できるアスファルトの路面と、高知市観光課による立派な案内板が完成したことを確認した。内容も簡にして要なるもので、これで県外からの来訪者にも、親切な観光案内となった。一同、板垣退助の墓前にも報告。

NHKにより、報道もされ、県内にも広く告知された。翌日、谷が高知市商工観光部、観光振興課・課長村田憲司、主査吉井真実氏に会い、会長代行として挨拶、協力をいただいた県議会議員、市議員(いずれも秘書)にも礼を述べた。これで当会としての悲願が一つ高知市により実現されたことになるが、高知自動車道から導入する道路標示については、今後の問題である。

※また、六月二十二日、午後二時から二時間、伊野史談会(吾川郡)より、要請があり、谷が個人の作業として「板垣退助の生き方」という講演をした。



板垣退助の墓前に標柱を設置する高岡功太郎さん(高知市薊野東町)

板垣の功績墓所に

高知市 顕彰会 命日に合わせ標柱

自由民権運動の指導者の玄孫で「板垣退助助成者、板垣退助の命日」生顕彰会(理事長の高岡功太郎さん)が、(16日)を前に、板垣

庫伊丹市が15日、高知市薊野東町の墓地に埋葬者名などを記した標柱を設置した。板垣は1919年に82歳で死去。東京・品川の墓所に葬られ、50回の68年に高知自動車道高知インターチェンジ近くの通称「板垣山」に分祀された。墓所には板垣の正妻や乾家(板垣の旧姓)代々の墓など約30基が立つ。古い墓も多く、「配置

が順不同で埋葬者が誰か分からない(高岡さん)ことから、名前や評伝などを記した標柱を高岡さんが自作。各墓前に計24本を打ち込んだ。

墓地の存在は県内であまり知られておらず、没後100年以上を経ても板垣の功績は色あせない。墓にももう少しスポットライトが当たってくれば」と話した。(谷沢文流)

令和3年7月17日(土) 高知新聞朝刊



駐車場の表示板

(谷)



役員らが清掃



役員らが墓前に報告

■ 板垣会々員募集 ■

年会費 2,000円

板垣退助顕彰に御協力を!

入会は別途振込用紙をご利用
ください。

-
- 2021年11月30日 発行
 - 発行者 古谷 俊夫
 - 発行所 高知市本町2-2-31
 - 特定非営利活動法人 板垣会
 - TEL(0887)55-2860
-

会議・宴会・祝事・祭事・法要等にご利用いただける
多目的ホール・座敷 各種会場を完備

観光・ビジネス・スポーツ合宿等 目的に合わせてご宿泊可能

ひとときわ輝くおもてなし

高知 サンライズ ホテル

www.kochi-sunrise.com

〒780-0870 高知市本町 2丁目 2-31 Tel 088-822-1281



明治維新、自由民権運動の主導者としてがんこなまでに民主化を進めた板垣の意思をがんこまんじゅうにたくしました。



有限会社 小笠原

高知市本町3丁目4-6
TEL 088-875-2430